

# 第18回 全国果樹技術・経営コンクール 受賞者の概要

主 催 全国果樹技術・経営コンクール実行委員会

全国農業協同組合中央会  
全国農業協同組合連合会  
日本園芸農業協同組合連合会  
全国果樹研究連合会  
公益財団法人 中央果実協会

後 援 農 林 水 産 省

日 本 農 業 新 聞

## 第18回 全国果樹技術・経営コンクール 受賞者

### ○農林水産大臣賞

新潟県	有限会社白根グレープガーデン	笠原節夫・笠原秀子
大阪府	中村恵俊・中村公子	
佐賀県	立石好之・立石美紀	
静岡県	三ヶ日町柑橘出荷組合	

### ○農林水産省生産局長賞

青森県	有限会社成田りんご園	成田健二郎
山梨県	小川善英・小川ふじ子	
鳥取県	岡本誠・岡本和加子	
長崎県	山口賢剛・山口多美子	
岩手県	岩手江刺農業協同組合りんご部会	
佐賀県	JA からつ上場果樹部会	

### ○全国農業協同組合中央会会長賞

愛知県	山本保一・山本千代	
茨城県	JA 常陸 笠間地区栗部会	
福岡県	にじ農業協同組合柿部会冷蔵部	

### ○全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

香川県	建石照夫・建石房子	
大分県	小手川洋邦・小手川君代	
岐阜県	東美濃栗振興協議会	

### ○日本園芸農業協同組合連合会会長賞

福島県	黒田 武	
和歌山県	中家眞樹・中家佳菜	
山梨県	JA ふえふき石和支所第2共選所柿部会	

### ○全国果樹研究連合会会長賞

福島県	北條雄三・北條睦子	
愛媛県	吉川典多佳・吉川妙	
熊本県	平野洗一・平野厚子	

### ○公益財団法人中央果実協会理事長賞

福島県	石田仁一・石田美智代	
沖縄県	山城栄徳	
山形県	庄内みどり農業協同組合遊佐町遠赤外線パーシモン組合	
長崎県	長崎県央農業協同組合ハウスみかん部会	

### ○全国果樹技術・経営コンクール実行委員会特別賞

熊本県	熊本県果実農業協同組合連合会	
-----	----------------	--

## はじめに

### 全国果樹技術・経営コンクール実行委員会 委員長 弦間 洋

当コンクールは、平成11年度から、生産技術や経営方式等において他の模範となる先進的な農業者、生産団体等を表彰し、その成果を広く紹介することにより、我が国果樹農業の発展に資することを目的として発足したものです。

近年の果樹農業を取り巻く環境には厳しいものがあり、高齢化が進展する一方で、次世代への園地の継承が円滑に進まず農地の荒廃が加速するなど、生産基盤の脆弱化がみられるほか、需要の伸び悩みや価格の変動、資材費の高騰などの問題にも直面しています。

このような状況に対応するため、平成27年4月に公表された果樹農業振興基本方針に即し、果樹農業の所得向上に向けて、消費者ニーズに合った高品質な果実の生産に始まる好循環を形成するための産地間や異業種などとの「連携」を強化する諸施策が進められています。

このような施策が所期の成果をあげるためには、関係者の主体的な活動、とりわけ、産地の自助努力が必要かつ不可欠であり、産地振興の中核的役割を担っている方々の活動が最も重要です。

当コンクールは、技術・経営のモデルとして受賞者の成果を広く普及するとともに、先進的な取組を実践している産地・生産者を励まし、施策の具体的な推進の中核的役割を担っていただくという視点から実施されており、現下の情勢において大変大きな意義があるものと考えております。

今回、第18回目のコンクールには、近年にない多数の応募をいただきました。県によっては7年ぶりや初めての参加もあるなど、広がりを見せています。受賞者の技術・経営の概要は、以下に取りまとめられているとおりでありますが、いずれも、各地域において困難な諸条件を克服しつつ、独自の創意工夫や最新の知見の活用、計画的・効果的な投資、集団・地域の合意形成など、主体的、積極的な実践によって、高い水準の技術・経営を身をもって達成し、他の模範となる方々です。

受賞者の皆様には、長年にわたるご努力、ご研鑽に対し深く敬意を表し、心からのお祝いを申し上げますとともに、受賞を契機に、今後とも地域更には全国の果樹農業の中核的な先導者として一層ご活躍されるよう期待する次第です。

結びに、ご指導・ご協力を賜りました農林水産省をはじめ関係機関・団体の皆様、厳正な審査に当たられた間苧谷座長をはじめとする審査委員の方々に対し、深甚の感謝を申し上げます。引き続き、本事業が多く果樹農業者の啓発や士気・意欲の高揚、更には我が国果樹農業の新たな発展に資する意義深いものとなるよう、今後ますますのご理解とご支援をお願い申し上げます。

## 農林水産大臣賞

- 新潟県 <sup>にいがたし</sup>新潟市 (ぶどう、なし、もも 他)  
有限会社 <sup>しろね</sup>白根グレイプガーデン <sup>かさほら</sup>笠原 <sup>せつお</sup>節夫 (55歳)・<sup>かさほら</sup>笠原 <sup>ひでこ</sup>秀子 (56歳)

ぶどう215a(うち施設115a)、いちご65a、なし25a、もも20aなど11品目91品種415a(うち果樹350a)を栽培し、年間を通じて収穫ができる観光農園である。

自園産果物を使ったジェラートやジャム、ドライフルーツ等の加工品の製造販売にも取り組み、子供たちのための小動物とのふれあいの場や大人たちの癒しの場も設けて、就農当時年間3～4千人だった来園者が現在12～13万人に増大している。

経営発展に伴い、夫婦、父母、後継者夫婦のほか、8人を通年雇用しており、近隣生産者からの要請を受けて経営規模も150a拡大した。

味にこだわり巨峰の有核栽培を行うほか、シャインマスカット等新品種を地域に先駆けて導入している。土づくりにもこだわり、完熟堆肥を毎年100トン施用し、剪定枝をチップパーで粉碎して園地に還元している。ぶどうの地際分岐による樹冠拡大やぶどうハウスの自動換気システムなど新たな技術の導入にも積極的で、それが地域に波及している。

収穫体験・フルーツピザ作り体験の中で農業解説を行うなど来園者の農業理解を深める取組を行うほか、園児・小中学生の農業体験や高校生のインターンシップ、農業大学校生等の農業研修を受け入れ、農業の人材育成にも積極的に取り組んでいる。

地域の指導農業士会会長を務めるほか、JAの部会等にも積極的に参加し、今は後継者が青年部長として活動している。

## 農林水産大臣賞

- 大阪府 <sup>おおさかきやまし</sup>大阪狭山市 (ぶどう)  
<sup>なかむら</sup>中村 <sup>しげとし</sup>惠俊 (65歳)・<sup>なかむら</sup>中村 <sup>きみこ</sup>公子 (60歳)

ハウスぶどう106aを栽培し自らの直売所で有利販売している果樹専作経営であり、夫婦、後継者の家族3人に加え、常時雇用1人により営まれている。

地域に先駆けて露地栽培から施設栽培を中心とする経営に転換し、高品質のぶどうを生産して地域住民を相手に採れたてのぶどうを自らの直売所で販売する手法を確立して、地区のモデルとなり、「大野ぶどう」をブランド化した。

府内で先駆けてアーチ型ビニールハウスやポリカーボネートの温室を導入し、高い栽培管理技術により高品質化を実現した。加えて、この直売所でしか買えない十数種類のオリジナル品種を育成・生産し、希少価値を生かして高所得を確保している。

周辺農地を購入して規模拡大を図るほか、様々な品種・作型を導入し詰合せ用に3色のぶどうを常時揃え、直売所のほかネット販売に取り組むなど、優れた経営を実現している。

傾斜地の平坦な農地への改良や園内道の整備により作業性を向上させているほか、貯水槽の整備や剪定枝等を活用した堆肥づくり、品種に応じたハウス内のきめ細かな温度管理等の栽培技術により、高品質なぶどうを生産している。

市果樹振興会の会長を務め、自らのノウハウを地域に普及指導するとともに、府内若手生産者の良き相談相手として地域農業をリードしている。

## 農林水産大臣賞

- 佐賀県 <sup>さがし</sup>佐賀市 (かんきつ)  
<sup>たていし</sup>立石 <sup>よしゆき</sup>好之 (39歳) ・ <sup>たていし</sup>立石 <sup>みき</sup>美紀 (39歳)

露地うんしゅうみかんを主体とする、県内トップクラス594aの大規模かんきつ専作経営であり、夫婦、父母、常時雇用2名と農繁期の臨時雇用により営まれている。

常緑果樹研修所を経て、就農5年目で経営を承継し、現在21年目であるが、園内道等の基盤整備やSS導入等の機械化、分散園地の集約化を進め、安定経営を実現している。

地区のブランドみかん「あんみつ姫」を守り育てるため、全ての園地でマルチ被覆を行い、高品質生産を実践し、連年5トン以上の高単収も確保している上、優れた貯蔵熟成技術を持ち、貯蔵みかんは毎年90%以上のブランド率を達成している。

うんしゅうみかん不適地は施設のせとかや不知火に転換し、経営規模は全体で1ha近く拡大しており、販売金額は就農前に比べ倍以上に増大し、所得率も向上した。

土づくりにもこだわり、園地の土壌条件に応じて堆肥や石灰資材を使い分け、剪定くず等もチップーを使って還元している。園地の8割以上で基盤整備を進め、作業の効率化、省力化も推進している。

高品質安定生産の取組は地域内農業者に波及し、ブランド意識の拡大につながっている。地域の若手果樹後継者組織を設立し、代表も経験して、栽培技術や経営改善の助言や新規就農者の勧誘等に精力的に取り組んできた。

## 農林水産大臣賞

- 静岡県 <sup>はまつし</sup>浜松市 (うんしゅうみかん)  
<sup>みつかびちようかんきつしゅつかくみあい</sup>三ヶ日町柑橘出荷組合 (昭和35年設立) (代表者 <sup>たけひら</sup>竹平 <sup>ともりの</sup>智範)

うんしゅうみかん1,413haを栽培する組合員804戸の出荷組合であり、平成27年産の共同出荷量は29,311トン、出荷額は約84億円である。

優れた団結力、卓越したマーケティング、徹底した組合員指導で、三ヶ日ブランドを確立し、組合員一戸当たり販売額1千万円以上を6年連続で達成している (H19~21 平均868万円→H25~27 平均1,060万円)。

実需者からの信頼を得るために完全計画出荷を取り入れ、どんな年でも妥協を許さない厳格な選果基準の厳守をベースとして「マルエム三ヶ日みかん」ブランドを守っている。

全国に先駆け、JAが事業窓口となる農地中間管理事業を活用した組合員の規模拡大への支援や果樹共済への団体での加入等の取組を組合員と産地の発展のため推進している。

平成13年に導入した光センサーの選果データと地図情報システムを組み合わせることで園地別に生産状況を解析し、気象観測データ等に基づく的確な生産指導を実施しており、こうした品質向上対策への取組が主要産地の模範となっている。

さらに、十数年にわたり国の研究機関や大学医学部と連携して町民参加の疫学調査を進め、うんしゅうみかんに含まれるβ-クリプトキサンチンが骨の健康に役立つことを明らかにし、果実の含有量のばらつきを非破壊センサーで推定可能なことを突き止めて、生鮮食品として第1号の機能性表示食品の届出を行うなど、様々な方法で差別化に努めている。

このような取組により、日本でトップクラスの販売価格を実現し (平成27年産温州みかん産地別単価ランキング1位(東京青果))、組合員の生産規模は全国平均の2倍、所得は全国平均の4倍以上となっており、組合設立以来、上昇傾向を続けている。

## 農林水産省生産局長賞

- 青森県 <sup>きたつがるぐんいたやなぎまち</sup> 北津軽郡板柳町 (りんご)  
有限会社 <sup>なりた</sup> 成田 <sup>えん</sup> りんご園 <sup>なりた</sup> 成田 <sup>けんじろう</sup> 健二郎 (72歳)

りんご 373a の専作経営であり、夫婦、後継者（医師であるが週 4 日農業に従事し積極的に経営に参加）のほか、常勤 6 名を雇用して営まれている。

生果は、大手スーパー等への直売・ネット宅配がほぼ 100% を占め、市場単価の 2~3 倍で販売している。加工適性の高いスターキングや紅玉も栽培し、独自ブランドのジュースとして商品化している。平成 14 年に有限会社組織に変更し社会的信頼を基礎に大手スーパー等との取引を拡大した。平成 28 年にはグローバル GAP を申請し香港への試験輸出も行っている。

県内で最も早くマメコバチ授粉を地区として取入れ結実確保と良品生産を推進している。平成 15 年には「葉とらず栽培」であっても全面着色する方法で特許を取得し、「<sup>ひむか</sup>陽向果」の商標でギフト用等として販売している。消費者ニーズに応じて、土づくりと特別栽培にも取り組む。

規模拡大を進め、平成 28 年には 4 ha を超える面積に拡大中である。平成 16 年以降、町農業振興推進協議会委員を務めるとともに、町商工会理事として農業と商工業の連携、地域活性化に貢献している。県農業青色申告会会長として青色申告の普及に尽力している。

## 農林水産省生産局長賞

- 山梨県 <sup>やまなしし</sup> 山梨市 (ぶどう、もも)  
<sup>おがわ</sup> 小川 <sup>よしひで</sup> 善英 (66歳) ・ <sup>おがわ</sup> 小川 ふじ子 (64歳)

ぶどう 78a (うち施設 41a)、もも 42a の果樹専作経営を夫婦で営んでいる。

昭和 43 年の就農当時の露地栽培中心の経営から、気象リスク軽減、労力分散のために施設栽培中心の経営に切り替えた。急傾斜地という不利な条件を逆手にとって、採光性と気温の逆転層を生かした効果的な施設経営を推進している。

施設栽培を中心としつつ露地を組み合わせて、4 月から 10 月までの半年以上の長期にわたって切れ目のない品種構成としつつ、管理作業が集中しないよう出荷するなど労力配分に配慮し高収益を確保している。

ぶどうの施設栽培においては、加温用燃料代の高騰に対処するため、いち早く地中熱交換方式を導入するとともに、高品質化のためのウイルスフリー樹による栽培を開始した。導入したウイルスフリー樹の特性は、園芸雑誌にも掲載されて他の栽培者の改植の際の検討資料としても活用された。また、高い栽培技術が求められる超早期加温体系に取り組み、二度切りや炭酸ガス処理、生育状況に合わせた温湿度管理によりデラウエアの高品質安定生産を実現している。

ももについても、計画的な樹の更新とニーズに合わせた新品種の導入、高い生産技術により平成 4 年には 42 歳の若さで県共進会での農林水産大臣賞を受賞した。

青年期から青年農業士、4H クラブ会長を務め、その後も指導農業士、農業委員を歴任し、地域農業の振興、後継者育成に中心的な役割を担っている。自らのデラウエア施設栽培のノウハウ、ウイルスフリー樹導入等についても地域に普及するなど産地のレベルアップにも貢献している。

### 農林水産省生産局長賞

- 鳥取県 <sup>とうほくぐん ゆりはまちょう</sup> 東伯郡湯梨浜町 (なし)  
<sup>おかもと まこと</sup> 岡本 誠 (64歳) ・ <sup>おかもと わかこ</sup> 岡本 和加子 (61歳)

なし166aを中心とした水稲128aとの複合経営を夫婦で営んでいる。

二十世紀のブランド産地にあつて、二十世紀の出荷量では地域で常に上位に入るほか、積極的な土づくり、きめ細かな袋かけ等管理作業により、上位等級の赤秀率は他の生産者を10ポイント以上上回り、共進会でも優秀賞を受賞している。

経営継承後、傾斜地から平坦地に園地を移動し、SSや運搬車を利用できるようにして作業を効率化した。

家族労働力を最大限活用するため、早生から晩生まで収穫期の異なる品種を導入して収穫・管理作業の分散を図っている。県育成のオリジナル品種など新品種についても他の生産者に先駆けて導入し、収益性の高い経営を実践している。二十世紀のブランド産地ゆえに地域の7割以上を二十世紀が占めているが、氏の園地では新品種導入により二十世紀の割合を5割台に低減させ、作業の平準化を図って規模拡大を実現しており、地域の模範となっている。

高い技術を有することから指導員としてブランド産地の生産指導を行うほか、町果樹研究協議会の会長を務めるなど地域の栽培技術の向上に貢献してきた。

### 農林水産省生産局長賞

- 長崎県 <sup>にしそのぎぐんながよちょう</sup> 西彼杵郡長与町 (うんしゅうみかん)  
<sup>やまぐち けんごう</sup> 山口 賢剛 (57歳) ・ <sup>やまぐち たみこ</sup> 山口 多美子 (56歳)

うんしゅうみかん345a、中晩柑92a、水稲30a等、合計477aの果樹を中心とする大規模経営であるが、夫婦、後継者、母の家族4人で営んでいる。

就農当時の3.0ヘクタールから4.77ヘクタールに規模拡大するとともに、老木園を優良品種・系統に積極的に更新し、樹齢構成は30年生未満が97%となっている。市場評価の低い極早生は10%未満まで削減した。園内道等も整備し、省力軽労働化を実現している。

品質向上対策として、シートマルチとフィガロン散布により熟期促進と増糖効果を図っているほか、カルシウム剤の葉面散布により果皮の体質を強化し浮皮軽減を図っている。

マルチ被覆率は園地の95%（地域全体では30%）と極めて高い。結果樹面積全てを園地指定登録し農協ブランドの「長崎の夢」「味ロマン」を多く出荷している。

地域でもいち早くシートマルチ、SS導入等に取り組み、柑橘農家のモデル的経営を実践し、地域の模範となっている。

平成27年6月からは、県下最大の柑橘部会員1100名を超える長崎西彼農協柑橘部会初代部会長に就任し、ブランド確立に貢献している。地域内で新たにみかん栽培を始める新規就農者の受入れや高齢農家のみかん園を担い手に集積させる取組も柑橘部会で推進している。

## 農林水産省生産局長賞

- 岩手県 <sup>おうしゅうし</sup> 奥州市 (りんご)  
<sup>いわてえさしのうぎょうきょうどうくみあい</sup> 岩手江刺農業協同組合 <sup>ぶかい</sup> りんご部会 (昭和57年設立) (代表者 <sup>きくち としひろ</sup> 菊池 敏洋)

りんご 272ha を栽培する 109 戸の JA 部会であり、平成 27 年産の共同出荷量は 2,071 トン、出荷額は約 7 億円である。

りんご生産農家のほぼ 100% が加入し、摘果、剪定の現地講習会の開催や新品種の実証圃の設置、取引先との調整、女性部「アップルレディース」による販売 PR 活動等を担っている。

主力の「サンふじ」の糖度基準を県指標より高く設定し、熟度、蜜入り等の基準も設けて選果基準を厳格化し、高品質果実を全国に出荷して「江刺りんご」の知名度を高めている。他産地との出荷競合による価格下落を回避するため、1-MCP 処理による長期貯蔵に取り組み、翌年 5 月までの長期出荷で販売額を増加させている。16 年生以上の樹は毎年 5% 程度の計画的な改植を進め、生産基盤の安定強化を図っている。地域団体商標として「江刺りんご」を登録し、ワインやジュースの加工にも取り組み、りんごジュースは「伊勢志摩サミット」でおもてなし品として選ばれた。

省力化と早期多収化を目指し全国に先駆けて確立してきた「わい化栽培技術」や、「ふじ」と JM7 の組み合わせによる高品質生産技術は全国に普及している。近年の 1-MCP 処理技術や極早生品種「紅ロマン」の導入は当部会が先駆けて取り組み、県内他産地にも広がりを見せている。消費者の収穫体験や各種イベントの開催を通じて農業理解と地域活性化にも大きく貢献している。

## 農林水産省生産局長賞

- 佐賀県 <sup>からつし</sup> 唐津市 (うんしゅうみかん、甘夏柑)  
JA <sup>うわばかじゅぶかい</sup> からつ上場果樹部会 (昭和 44 年設立) (代表者 <sup>さかくち のぶひさ</sup> 坂口 伸久)

ハウスみかん 45ha を中心に果樹 96ha を栽培する構成員 125 戸の JA 部会であり、平成 27 年産の共同出荷量は 3,071 トン、出荷額は約 16 億円である。

ハウスみかんでは、定例研究会による生産技術の平準化や、燃油高騰時にはヒートポンプ等の導入を行い、面積を縮小することなくブランドを死守し、数量では日本一の産地となっている。省エネ対策として、3 重カーテン施設を 9 割のハウスで導入している。

露地みかんでは、着花、着果時期に全園地を部会員が巡回して状況確認し指導を徹底している。平成 13 年から地区独自ブランドとして、マルチ栽培園から厳選した「うわばの夢」の出荷を開始し、全国から応募された青果物を野菜ソムリエが評価する第 8 回野菜ソムリエサミットにおいて食味評価部門で大賞を受賞した。

新植・更新苗木を導入し園地の若返りと極早生から晩生への転換を促進しており、予措施設の空調機能や保温機能を強化しブランド率の向上にも努めている。平成 26 年度からは、貯蔵みかんの生産販売に着手しており、農協の大型貯蔵施設を利用した一元集荷システムは全国でも類をみない取組である。

露地みかんの隔年交互結実とマルチ栽培を組み合わせ高品質果実生産に取り組むほか、部会員全員がエコファーマーを取得し農薬散布履歴を JA に提出して安全を確認している。今後はスケールメリットを生かした「OnlyOne」商品づくりをすすめ、数量・品質ともに日本一を目指している。

## 全国農業協同組合中央会会長賞

- 愛知県 <sup>とよはしし</sup>豊橋市 (ぶどう)  
<sup>やまもと やすいち</sup>山本 保一 (85歳) ・ <sup>やまもと ちよ</sup>山本 千代 (78歳)

ぶどう105a、かき61aの果樹専門経営を夫婦で営んでいる。

露地ぶどうの栽培面積は豊橋市内で最大規模であるが、多品種生産による労力分散と全量農協出荷による出荷作業の外部化、平行整枝短梢剪定を導入した管理作業の単純化等によるパート労働力の活用により、高齢になっても可能な大規模果樹経営のモデルとなって地域を牽引している。

樹形改造によるぶどう平行整枝短梢剪定は平成14年から導入したもので、剪定作業を単純化し、夫婦での作業が可能となった。パートへの作業指示を的確に行い整粒作業は全てパートが行うなど作業がしやすい環境をつくっている。消費者ニーズに合わせた品種更新を園地単位で行っており、更新サイクルも20年程度と他の生産者より早い。

温暖化に対応したぶどうの着色向上のための環状はく皮の実証試験を実施し、その成果は県内外の多くの生産者からも注目されている。ぶどうの無核栽培のためのジベレリンの利用方法にも工夫をこらし、他産地に先駆けてジベレリン1回処理技術を導入し、管理作業を効率化した。

昭和50年代に地域のぶどう「デラウェア」生産者を組織化して「ぶどうの会」を設立しており、自ら新技術の実証に取り組み、その成果を地域に普及するなど、地域の先生としての指導的役割を果たしている。高齢になってもチャレンジを続けており、園地の更新・改植を続けている。

## 全国農業協同組合中央会会長賞

- 茨城県 <sup>かさまし</sup>笠間市 (くり)  
<sup>ひたちかさまち くりぶかい</sup>JA常陸笠間地区栗部会 (昭和41年設立) (代表者 <sup>かねこ しょういち</sup>金子 祥一)

くり200haを栽培する267戸のJA部会であり、平成27年産の共同出荷量は142トン、出荷額は約67百万円である。

笠間市は県内でも1・2を争う栗産地であり、当部会は昭和41年に発足し50年の歴史を有する。市内での栽培面積の1/4を部会員が占め、部会員の多くは水稲、野菜、他果樹との複合経営である。栗は自家選別の上、重量選別機を導入して厳密に規格分けされ、4Lサイズの栗の出荷が可能となり、他産地との差別化が図られている。

早生、中生、晩生の多くの品種が栽培され、労力分散とリレー出荷が可能となっている。このうち9品種で品種別出荷が図られて市場評価の向上にもつながっている。さらに、一部を貯蔵して糖化させてから販売する貯蔵栗にも取り組み笠間の栗のブランド化にも寄与している。

一年生枝を利用した更新剪定や低樹高栽培を取り入れ、大粒生産にも取り組んでいる。品種別出荷のために、列ごとに品種を植栽するなど異品種混入の防止を図っている。多品種生産から奨励品種への絞り込みを行うとともに、改植による園地の若返りをすすめ、産地としての品質向上に取り組んでいる。

部会の取り組みは「笠間の栗」のけん引役となっており、産地の知名度は全国的なものとなってきている。

## 全国農業協同組合中央会会長賞

○ 福岡県 うきは市 (かき)

のうぎようきようどうくみあいかきぶかいいいぞうぶ  
にじ農業協同組合柿部会冷蔵部 (平成14年設立) (代表者 はら ゆうじ 原 裕二)

かき 185ha を栽培し冷蔵出荷する構成員 102 戸の JA 部会冷蔵部である。平成 27 年産の共同出荷量は 1,095 トン、出荷額は約 5 億円である。

県内最大の JA 柿部会の中で冷蔵富有を専門的に扱う組織として設立され、富有の出荷量の 30% を冷蔵し出荷調整機能を担っている。生果実の価格安定に貢献するとともに、冷蔵富有の高値販売を実現している。

構成員を二つのグループに分け、それぞれ隔日に出荷する体制を組み、出荷配送の省力化を図るほか、自動シール機の導入、雇用労力の活用により冷蔵作業を共同化し、個別農家の労働負担を大幅に軽減している。生産者は収穫、調製に専念することができ、園地荒廃の防止と規模拡大を支援することで、冷蔵量を拡充し、産地を担う役割を發揮している。

役員会を中心に着色を基準として園地の成熟度を現地調査し、集荷開始時期を判断するほか、戸別に冷蔵された果実の点検も役員が行って品質管理を徹底している。

果実軟化を回避するため、土壌診断に基づく施肥改善に積極的に取り組むとともに、病害虫防除の徹底により高品質な果実を生産している。気象情報を利用した早期予測技術によりの確な管理作業を実施し、生産履歴を全員が提出して GAP の推進にも努めている。

高値で販売される冷蔵富有は、かき全体の販売力、ブランド力の維持に貢献しており、個別農家の所得向上と産地維持に不可欠な存在となっている。

## 全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

○ 香川県 まるがめし 丸亀市 (もも)

たていし 建石 てるお 照夫 (73 歳) ・ たていし 建石 ふさこ 房子 (67 歳)

もも 74a、かき 10a を中心に水稲 50a や田植え等の作業受託にも取り組む複合経営であり、夫婦によって営まれている。

JA に勤務しながら、もも栽培を学び、退職後に本格的に専業農家となって園地整備と規模拡大を進め、今では地域の中核的な農家として技術・経営ともトップレベルとなっている。最新選果施設を使った共選共販体制の確立、市場評価の向上にも大きく貢献した。

消費者ニーズに応え、早生から晩生まで収穫期が重ならないような品種構成とすることにより、作業分散による規模拡大を図り、ももの作業が少ない時期は干し柿や水稲作業受託で所得を確保している。JA と連携して多様な流通販売を行っており、市場出荷のみならず、ゆうパック利用による産地直送や、ももの木オーナー制度等にも取り組み有利販売を行っている。

石ころ混じりの安山岩土壌の園地において高品質果実を生産するため、植付け前に客土や深耕等土壌改良を徹底し、忌地を回避している。また、植栽間隔を広げて採光性と作業性を向上させ、品質向上と増収につなげている。これまでの三本主枝整枝を二本主枝整枝に切り替え、管理作業を効率化するとともに、樹や品種ごとの特性に合わせた基本管理の徹底により、高品質果実の生産を実現している。

氏の高い栽培管理技術が周辺に理解され、相談者が増加している。新品種を率先して取り入れ、栽培のポイントを地域内の生産者に普及させたことで、「なつおとめ」は今では地域の主要品種となり、全国屈指のブランド産地として定着している。

## 全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

- 大分県 <sup>つくみし</sup>津久見市 (かんきつ)  
<sup>こてがわ ひろくに</sup>小手川 洋邦 (62歳) ・ <sup>こてがわ きみよ</sup>小手川 君代 (53歳)

セミノール47aを柱にかんきつ150a(うち施設50a)の果樹専門経営を夫婦中心に営んでいる。後継者(長男)も近年中に就農する予定である。

昭和52年に就農し、露地みかん中心の栽培から地域初のハウスカボスやハウスみかんの栽培に取り組んだ。現在はセミノールを経営の柱としつつ、ハウスみかんから大分県のオリジナル品種「大分果研4号」の屋根掛け栽培やザボンなどに品目転換を図り、作業分散による効率的な栽培体系を確立している。

栽培面積は地域平均の50aに比べ150aと大きい。更に施設・露地の拡大を図り、法人化を視野に入れた経営を目指している。

販売は全量農協に出荷している。労力分散のために多品目を栽培し、除草作業の省力化にナギナタガヤを導入しているほか、収穫時に脚立のいらぬ低樹高に改造し、作業性を大きく向上した。

低樹高化による作業効率の向上で適期の栽培管理が可能となり、園地の様子を頻りに観察して的確な管理作業を進めることで高品質生産を実現しており、正品果率は毎年9割前後と極めて高い水準を維持している。

中山間地域等直接支払制度に市内で最初に取り組むとともに、獣害対策として防護柵設置事業の推進に中心的役割を果たしており、周辺で営農を再開する園地が多くなっている。4Hクラブ会長や指導農業士を務めるなど地域生産者のリーダー的存在である。

## 全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

- 岐阜県 <sup>なかつがわし</sup>中津川市 (くり)  
<sup>ひがしみのくりしんこうきょうぎかい</sup>東美濃栗振興協議会 (昭和37年設立) (代表者 <sup>さかきま のぶあき</sup>榎間 信明)

くり96haを栽培する構成員182戸の協議会であり、平成27年の共同出荷量は133トン、出荷金額は1億円である。「栗きんとん」発祥の地で60軒を超える和菓子屋がある東美濃地域において設立50年以上になるくり生産者組織である。

菓子屋からの高品質な地元産くり供給の要望に応えるため、超特選栗部会を組織し、契約栽培での生産を行っている。出荷の前日の夕方又は当日朝に収穫されたくりだけを選別し、その日のうちに地元菓子業者に納品されており、加工段階で廃棄されるロス率は0.9%と低く、高い評価を得ている。

また、ぼろたんの生産と独自の販売ルートを開拓するため、東美濃ぼろたん研究会を設立し、異品種混入防止等を図るため、植栽図の確認、出荷登録、目ぞろえ会の開催等に取り組んでおり、これまで混入クレームはゼロである。予冷庫内で1か月以上熟成させて糖度を上げてから出荷することにより、高級百貨店等でも販売され、高単価を実現している。

低樹高(3.5m)超低樹高(2.5m)の技術導入のために実証圃を設置して普及に努め、剪定管理作業の省力化と経済樹齢の延長(30年以上)、全国平均の3倍以上の単収270kgを実現している。また、「剪定技術認定制度」を創設して剪定技術の向上に努めるとともに、剪定士が剪定できない圃場の剪定を引き受ける制度も設け産地維持に貢献している。

新規栽培者の技術習得支援や植栽負担の軽減等を行い、超特選栗部会やぼろたん研究会への加入を誘導して、産地の維持発展に大きく貢献している。これらの活動によって栽培面積は平成18年の62haから96haに拡大した。

## 日本園芸農業協同組合連合会会長賞

- 福島県 <sup>だてぐんくにみまち</sup>伊達郡国見町 (りんご、もも、おうとう)  
<sup>くろだ</sup>黒田 <sup>たけし</sup>武 (64歳)

りんごを中心とした果樹145aと水稻140aの複合経営であり、本人と後継者の家族労働主体で営まれている。

昭和55年に就農後、水稻の面積を減らして果樹を拡大しており、後継者の就農を契機におうとう栽培を開始するなど多品目化を進めている。

りんごやおうとうは顧客への直接販売が8割近くを占め、ももは農協出荷が約7割となっている。DM等の顧客管理や経営管理は自らパソコンを使って行っている。親子間で家族経営協定を締結し、武氏がももや水稻の生産管理と経営全体の収益管理を行い、後継者がりんごとおうとうの生産管理等を分担している。

顧客ニーズに対応した食味優先の栽培管理を行っており、贈答用無袋ふじの栽培では、シルバーシートを敷かず、葉つみを行わないで、毎年有機質肥料を投入し、蜜入りふじを生産している。顧客へのDMにより外観ではなく内容食味重視の生産販売を展開しており、震災前から顧客との信頼関係構築に力を入れてきた。

就農と同時にJA主催の果樹研究会に所属し現在も役員として同会を牽引している。町の認定農業者会会長や地区の農業委員を務めるなど地域農業の発展に貢献している。

## 日本園芸農業協同組合連合会会長賞

- 和歌山県 <sup>きかわし</sup>紀の川市 (かき)  
<sup>なかや</sup>中家 <sup>まさき</sup>眞樹 (39歳) ・ <sup>なかや</sup>中家 <sup>かな</sup>佳菜 (39歳)

かき450aを主体に、黒豆、うすい豌豆等の野菜を組み合わせた665aの大規模果樹複合経営であり、夫婦と父母に加え、常時雇用1人により営まれている。

父母の高齢化を機に平成18年にUターン就農後、規模拡大をすすめ、現在は就農当時に比べ1.5倍の経営面積になっている。園地内の間伐、園内道整備により作業効率を向上させ、同時に管理作業の適正化により作柄・経営を安定させている。中山間地域での農業を守るため、自ら儲かる農業を実践している。

平核無から中谷早生、刀根早生への早生化を進め、昨年からは樹上脱渋処理を取り入れて労力を分散している。さらに、かきの収穫期以外には黒豆、うすい豌豆等野菜を取り入れて、労力の活用と所得の確保を図っている。

就農後に積極的に園地改良に取り組み、全園地でSS防除が可能になるよう改善したほか、基準園を設けて土壌診断を継続して行い、その結果をもとに施肥改善を実施している。有機物補給のためにも草生栽培を導入し、麦類を主体とする草種に選定・改良を進めている。

中山間地域で高齢化が進行している中で、自ら儲かる農業経営を実践することで、地域へのUターンやIターンを呼び込みたいとの思いがある。大規模化に伴う雇用労働力確保が課題となっており、法人化や集落営農を目指している。

## 日本園芸農業協同組合連合会会長賞

- 山梨県 <sup>ふえふきし</sup> 笛吹市 (かき)  
JA <sup>いさわししよだいにきょうせんしよかきぶかい</sup> ふえふき石和支所第2 共 選所柿部会 (平成6年設立) (代表者 <sup>やなぎさわ あきら</sup> 柳 沢 章)

かき9ha、ぶどう10haを栽培する64戸のJA部会であり、平成27年産かきの共同出荷量は124トン、出荷額は約6千万円である。

昭和28年に果樹の共同出荷を目的とした出荷組合をスタートし、栽培指導から販売までを組織で一体として行う体制を整え、平成6年に石和支所第2共選場が整備されたことを契機に柿部会として再編された。栽培技術や、厳しい選果による高品質果実の出荷は引き継がれ、産地規模は小さいながらも高単価での販売が維持されている。特に、ブランド維持に欠かせない食味の安定のため、「早もぎ」を防止するための役員による圃場巡回を実施し、適期収穫を徹底している。

共選・共販体制のもとで1級品の果実しか出荷しないという自負のもと、厳しい出荷基準がとられており、部会員の生産量の65～75%が共選、その他は単価の安い個選となっている。きわめて高品質のために皇室にも献上され、また、県の逸品農産物認証制度での出荷団体の認証を受けており、共選出荷の20%が逸品として認証されている。

早場産地の有利性を生かすため、「松本早生富有」等を導入し、他産地より早い10月20日頃から出荷することにより高単価を実現している。大玉生産に向けた技術習得にも熱心で、砂質土壤に合った密植、独自の整枝方法で低樹高に仕上げている。剪定・摘果方法も工夫し隔年結果を回避した大玉安定生産を行っている。

柿部会の高い収益性の実現は、県内外の柿産地の見本となっており、部会を手本に県内他地域での産地化にも大きく貢献している。柿部会では子供が後を継いで世代交代が行われており、部会員間で若手を育成してゆく意識が強く、高品質の柿産地が維持されている。

## 全国果樹研究連合会会長賞

- 福島県 <sup>しらかわし</sup> 白河市 (もも、なし、りんご)  
<sup>ほうじょう かずみ</sup> 北 條 雄三 (59歳) ・ <sup>ほうじょう むつこ</sup> 北 條 睦子 (55歳)

果樹を主力に野菜や水稻との複合経営であり、夫婦や3人の子など家族で営まれている。降雹、降霜の多い地帯での安定生産のために、県内で初めての多目的防災網や防霜ファンを設置した。エコファーマーを取得し、消費者の安全志向に配慮した生産、規格外品を活用した加工品にも取り組んでいる。

ももやりんごを直売所や贈答用で販売しており、睦子氏の女性目線でのおしゃれなパッケージングや工夫を凝らした詰合せが高い人気を得て、他の商品に比べて高値で販売されている。さらに、規格外品を活用して「りんご飴」、「もも飴」、「りんごジュース」の加工品製造により付加価値を高めており、白河市のふるさと納税返礼品としても活用されている。

直売、贈答用販売向け生産として、食味にこだわり、堆肥、米ぬか投入による土づくりやグロースガンによる排水対策など果樹園の地力維持対策等にも力をいれている。

市の認定農業者協議会副会長、果樹生産組合長など多くの要職に就き、地域の発展と地域農業のリーダーとしても活躍している。県の新採普及員や農業短期大学校生の研修を受け入れるなど後進の育成にも熱心に取り組んでいる。

## 全国果樹研究連合会会長賞

- 愛媛県 <sup>やわたはまし</sup>八幡浜市 (うんしゅうみかん、中晩柑)  
<sup>よしかわ</sup>吉川 <sup>のりたか</sup>典多佳 (39歳) ・ <sup>よしかわ</sup>吉川 <sup>たえ</sup>妙 (38歳)

うんしゅうみかん182a(うち屋根掛け25a)、中晩柑68a 合計250aのかんきつ専作経営であり、夫婦、父母、常時雇用1人により営まれている。

平成15年に就農後、家族協定を結び、21年に経営移譲を受けた後は家族に給与を支出しながらも地区の標準を超える所得率を確保している。

宮川早生、南柑20号を主体としつつも、浮皮になりにくい石地温州を積極的に導入して品質を揃えることで市場からのクレームを減少させている。

マルチ被覆を含む園地の8割以上で点滴かん水施設を導入し、南予用水事業のとどかない園地には個人でスプリンクラーを設置して、かん水及び防除作業の労力軽減を図っている。また、園内道の整備等による作業効率化を図りながら、手を抜かないきめ細かな管理作業により隔年結果を防止して経営の安定につなげるなどし、単収は西宇和産地の目標を大きく上回る5.6トンを維持・確保している。

45歳以下の生産者で構成される同志会の役員を務め、地域の共選の生産推進員としても活躍し、地域の次世代リーダーとして若手農家から頼られる存在となっている。年配者とも積極的に意見交換して知識・技術の習得や交流に努めている。

## 全国果樹研究連合会会長賞

- 熊本県 <sup>くまぐんにしきまち</sup>球磨郡錦町 (なし、もも)  
<sup>ひらの</sup>平野 <sup>せんいち</sup>洗一 (59歳) ・ <sup>ひらの</sup>平野 <sup>あつこ</sup>厚子 (55歳)

なし150a(うち施設30a)、もも75aを中心とした280aの果樹専業経営であり、夫婦と常時雇用1人で営まれている。

就農後、自家の経営分析を行って、これまでの多品目経営からメロンの廃止、水田転作を進め、就農15年目に現在のなし中心の経営に転換した。就農前は会社員でなし栽培は素人であったが、地元や先進地に学び、絶え間ない努力によって高い技術を獲得し、安定した経営により高所得を実現している。

コストを掛けながら最大の所得の上がる経営管理を目指して、肥料、雇用、機械施設・品種更新に投資している。剪定箇所をチョークで示す等雇用者や研修生でも的確に作業ができるよう工夫する。JA 共販を中心としつつも、消費者ニーズを実感できる直接販売も実施しており、自らのホームページを開設して消費者にPRしている。

短果枝を活用する独自の剪定技術や、土壌分析結果をもとにしたEMぼかし肥料の施肥、カルシウム、微量要素施用によるみつ症回避、さらに、晩霜対策として全園地にスプリンクラーを設置するなど、随所に工夫を凝らしている。

農協の果樹青年部長、青壮年部長を務め、その後、果樹部会長等役員を歴任してきた。指導農業士を務め、国・県・町の職員や農大生等の研修生の受け入れを行うなど、地域農業の発展にも大きく貢献している。

## 公益財団法人 中央果実協会理事長賞

- 福島県 <sup>ふくしまし</sup>福島市 (なし、りんご、すもも)  
<sup>いしだ</sup>石田 <sup>じんいち</sup>仁一 (63歳) ・ <sup>いしだ</sup>石田 <sup>みちよ</sup>美智代 (61歳)

なし130a、りんご70a、すもも15aと水稲40aの果樹を中心とした専業経営であり、夫婦と常勤雇用2人で営まれている。平成11年に経営移譲を受け、これまでのなしの専業農家から、りんご、すももを取入れて生産リスクの低減を図っている。

主力のなしについては、優良系統への転換・多品種化を進め、労力分散、販売期間の長期化に取り組んでいる。JAの透過光式選果機の選別データを活用し栽培管理方法の改善に生かしている。

なし棚を利用したすもも(貴陽)の栽培に管内でもいち早く着手した。なしの優良系統への切り替えを契機にジョイント栽培にも着手している。秋季の結果枝育成と貯蔵養分の充実のために秋季剪定を取入れており、フェロモン剤の利用による殺虫剤の軽減にも取り組んでいる。

市の青年農業後継者会会長やJA梨専門部会長、JA理事等を務め、地域農業の発展に貢献してきている。後継者は県農業総合研究センターの研究生として果樹生産技術を学び、来春就農予定である。

## 公益財団法人 中央果実協会理事長賞

- 沖縄県 <sup>いとまんし</sup>糸満市 (マンゴー)  
<sup>やましる</sup>山城 <sup>えいとく</sup>栄徳 (58歳)

施設栽培のマンゴー142aの専作経営である。本人と後継者2人、常勤雇用3人で営まれている。

約10年前に初めてマンゴー栽培を始め、6年後には県マンゴーコンテストで最優秀賞を獲得した。その後も同賞を2度受賞し、県内のトップ農家としての地位を確立している。2人の息子を後継者として育て、県内に3か所の農園を有する142アールの大規模経営に発展させた。

農園を南北に分散することで収穫期間を通常の1か月から2か月に延長している。さらに施設内環境制御装置の導入により半月早い早出し出荷を目指している。「安定した生産と高品質マンゴーづくり」を目標にしており、単収2.2トンは県平均の2倍以上になる。販売は5割を市場出荷、2割をJA直売所、1割を県内外のデパート等果実専門店、2割をネット販売等と多チャンネル化を図っている。

園内の一本一本に目を配り基本技術を励行している。樹形を盃状型に誘引し、受光量の確保と併せて果実を目線の高さに調整して管理作業を省力化している。枝と果実をしっかり固定する手法を考案して、台風対策に大きな効果を上げている。また、早期の荒摘果により1枝1果の徹底した大玉生産を進め、収益向上を達成している。

これまで学んだ慣行技術をさらに工夫して独自の栽培技術を確立しており、それを視察者等にも惜しみなく伝えるとともに、若手後継者や新規就農者の受入れにも積極的に取り組んでいる。

## 公益財団法人 中央果実協会理事長賞

- 山形県 <sup>あくみぐん ゆぎまち</sup> 飽海郡遊佐町 (かき)  
<sup>しょうない</sup> 庄内みどり <sup>のうぎょうきょうどうくみあい</sup> 農業協同組合 <sup>ゆぎまちえんせきがいせん</sup> 遊佐町遠赤外線 <sup>くみあい</sup> パーシモン組合 (平成12年設立)  
(代表者 <sup>まつもと</sup> 松本 <sup>きいち</sup> 揮一)

かき 4ha を栽培する 3 戸が干し柿を製造販売するために設立した組合であり、平成 27 年産の柿の共同出荷量は 37 トン(うち加工用 7.2 トン)、干し柿の出荷額は 980 万円である。

特別栽培に取り組んでいたが、地域特性から出荷時期が遅く、強風や降雹等により傷果が発生し市場価格が低迷していた。そこで傷果の高付加価値化のために干し柿生産を行う当組合を発足した。予冷庫を設置し完熟果実の貯蔵期間を拡大して長期出荷体制を構築するほか、硫黄くん蒸を行わずに鮮やかなオレンジ色の「あんぼ柿」を生産することにも成功した。現在では消費者からの評価も高く、供給が需要に追い付かない状況となっている。

販売先を生協や大手量販店に集約し、少人数向けパッケージや包装資材の開発を消費者と一緒に進めるなど、有利販売への取組を推進している。ニーズの高まりにより、園地の規模拡大の動きや低コスト生産技術の試験導入も始まっている。

特別栽培は、意欲的な生産者、病害虫の発生が少ない園地、耕種的防除の実践など独自の基準を設けて取組を行っており、バイヤー等も生産現場に招いて産地評価を高めている。また、あんぼ柿は硫黄くん蒸せずに、温度管理や収穫時期の調整等独自の技術開発により、きれいなオレンジの外観に仕上がりに、通常品の 1.5～2 倍の価格で取引されている。

中山間地域の女性の貴重な雇用の場を提供しているほか、当組合の生産技術は、近隣にも波及し、庄内産干し柿全体のレベルアップにもつながっている。首都圏から生協組合員等の多くの消費者が産地を訪れ、農作業体験を通じた農業理解や I ターンもみられている。

## 公益財団法人 中央果実協会理事長賞

- 長崎県 <sup>いさはやし</sup> 諫早市 (ハウスみかん)  
<sup>ながさきけんおうのうぎょうきょうどうくみあい</sup> 長崎県央農業協同組合 <sup>ぶかい</sup> ハウスみかん部会 (平成 15 年設立) (代表者 <sup>ほり</sup> 堀 <sup>ふくまつ</sup> 福松)

ハウスみかん 2.5ha 等を栽培する 12 戸の JA 部会であり、平成 27 年産の共同出荷量は 149 トン、出荷額は約 1 億円である。

燃料費が高騰する中で全国的にはハウスみかんの生産規模が縮小傾向にあるが、部会組織が一丸となって各種の生産コスト低減対策を徹底し産地を維持してきた。生産物は JA 集荷施設で全量集荷し一括して選別・販売を行う。年 2 回の取引先との意見交換会、消費地での販売促進活動も自ら行い消費者ニーズの把握に努めている。

生産コスト低減のため、ヒートポンプの導入、ハウスの多重被覆、循環扇の導入、燃料高騰時のセーフティーネット対策に全戸加入、近紫外線カットフィルムによる薬剤散布回数削減等各種対策を講じ、重油使用量は従来の 53% に抑えられている。

部会員が一丸となって適期作業を徹底することで、部会の平均単収は 5,700kg と県平均 4,600kg を大きく上回っている。夏季剪定による安定した結果母枝の確保と加温前管理の徹底、炭酸ガス発生装置の導入、土づくり対策、腐敗果軽減のためのカルシウムの葉面散布など、高い技術力を持った匠集団として活動している。

ヒートポンプ等の先進的なコスト削減対策を県試験研究機関と連携して取り組み、その成果が県内産地にも波及しており、県内の産地の維持・発展に大きく貢献している。

## 全国果樹技術・経営コンクール実行委員会特別賞

### ○ 熊本県 (不知火)

くまもとけんかじつのうぎょうきょうどうくみあいれんごうかい  
熊本県果実農業協同組合連合会 (昭和29年設立) (代表者 うらた まさる 浦田 勝)

不知火やうんしゅうみかん等を3,273ha栽培する組合員2,961戸の果樹専門農協連であり、平成27年産デコポンの共同出荷量は8,787トン、出荷額は42.5億円である。

あまなつ農家の経営安定のため、平成2年にいち早く晩柑類「不知火」の優秀性を見極め、その産地化を決断し、県、生産者とともに一体となってブランド化を推進した。産地化と販売の中心となって「デコポン」の商標を取得し、平成9年には日園連と商標使用権許諾契約を締結して全国で品質基準をクリアした不知火を「デコポン」の名称で販売することを可能にし、全国で唯一の統一基準を持つブランド果物に育て上げた。

産地化を推進するため、県南地域を中心に適地への導入を推進するほか、施設栽培の導入、MAフィルムの活用により長期貯蔵出荷を実現するとともに、年内贈答用の「プレミアムデコポン」、葉付き果実、長期貯蔵果実など多様なこだわり商材を出荷し、消費者ニーズに応えている。

産地化当初のあまなつへの高接樹の品質不安定等の課題に対応するため、「M-16A」や県オリジナルの「肥の豊」への改植を支援するほか、各園地に合った技術指導体制を確立して品質向上によるブランドの維持向上にも努めている。

県の昭和期中晩柑はあまなつ主体の経営であり最盛期は売上高100億円を超える一大品目であったが、価格低迷で大きな打撃を受けていた産地の救世主として「不知火」の振興が図られてきた。今では県南の柑橘経営の大きな柱となっており、重要な品目に成長し、生産者の経営改善に大きく貢献している。